校長室だより～燦燦～ №５０１

一斉指導

2022.2.8

授業というと、一般的には学級単位の一斉指導を思い浮かべるだろう。しかし、学級も一斉指導も自然発生的に生まれたものではない。

寺子屋など近代以前の教育機関では、たとえ大勢の子どもが一つの部屋に居合わせても、学習は個別的に進められ、教材も一人一人違っていた。ほとんどの時間、子どもたちは各自のペースで指示された内容を自習しており、それを一人一人順番に師匠が呼んでは、少しの間、個別的に指導するのが基本だった。

日本では、近代に入ると、新しい時代が求める知識や行動様式を国民全員に急ぎ身に付けさせる必要があった。また、優れた人材を広く国の隅々から探し出し、登用する必要性があった。

ここで問題になったのが、大勢の子どもにどうやって教育を施すかである。個別指導は、子どもたちの学習保障には適しているが、一人の教師が面倒を見られる人数には限界があり、そのやり方で全国に学校をつくると、どうにも採算が合わない。

そこで採用されたのが、学級集団を相手にした一斉指導だった。学級制度の導入により、明治期には８０人の子どもを今と変わらない広さの教室にすし詰めにして一斉に教えることで、安価に教育を実施できるようになった。学級単位の一斉指導は、効率、それも子どもの学びの効率ではなく、学校運営の費用効率や教師による指導の効率を求める中で編み出され広まっていった。

教室には何事も素早くやれる速い子と、万事ゆっくりで遅い子がいる。速いのがよく、遅いのが劣るわけではない。遅い子は物事をじっくりと考え、丁寧な仕事をするかもしれない。速い子だからこその早とちりや失敗もあるだろう。速いか遅いか自体に優劣は付けられないし、付けるべきでもない。

ところが、現状では速い子が圧倒的に有利である。これは、通常の学習指導が子どもたちの間に存在する多様性を無視し、一定のペースで行われることに起因する。学習速度の遅い子は授業のペースに付いていけない。

教師は「５分でやってみましょう」と言い、５分後には「まだ終わっていない人もペンを置いて」と活動を打ち切らせてきた。７分あればやれる力を持つ遅い子は、中途半端なまま次の活動へと向かわせられる。途中で打ち切られた思考が学習を生む可能性は低く、費やされた５分は、その子の学びにとって十分な意味を成さない。

かくして、遅い子はその時間、できなかった子になる。問題は、そんな日々の累積が、いつしかその子をできない子、能力のない子にすり替えていくことである。

一方、速い子は問題なく学習を成立させられる。現状では、速い子はできた子になり、さらにできる子になりやすい。だが、悩みもある。教師が５分を設定したところを、３分でやり終えてしまうのである。速い子はいつも待たされており、物足りなさやいらだちを感じている。

このように、伝統的な一斉指導の教室は、せかされる子と待たされる子であふれ返ってきた。一斉指導は、子どもが実際に頭を働かせて学んでいる実学習時間が、意外なほど短い。学習速度一つとっても、これだけの問題がある。学習に影響する個人差には、習熟度、学習スタイル、興味・関心、生活経験などがある。ところが、授業は常にたった一つのペース、筋道、教材、内容、目標で行われてきた。子どもは、一人一人さまざまに違っている。違っていていいし、違っていることが、その子らしく学び、その子らしく育つことである。

学級という制度も、一斉指導というスタイルも続くであろう。そうであれば、原点に立ち返り、何ができて、何ができないのか。何をどうするべきなのかを考えてみる必要がある。